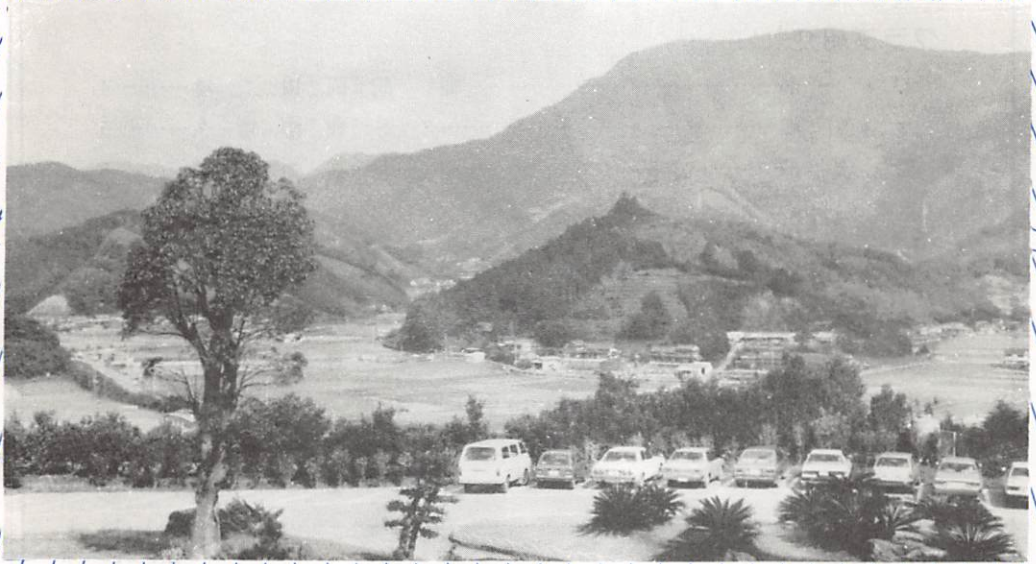


第6号
1981

会 報

にしきうら



高知県立須崎工業高等学校同窓会

目 次

御 挨 拶	学 校 長 西 村 博	1
同窓会の末永い発展を求めて	同窓会長 清 家 寛	2
	事務局長 島 崎 良 一	2
学 校 近 況	教 頭 久 正 一	3
職 場 訪 問 記	進路指導部 岩 瀬 哲 哉	4

クラブ紹介

バレー部	顧問 岡 田 健	4
ヨット部	3 S 楠 瀬 博 久	5
野 球 部	高 知 新 聞	5

支部だより

幡 多 支 部	松 沢 真 三	6
関 東 支 部	松 本 四 郎	6
中 京 支 部	岡 林 県 市	7
大 阪 支 部	下 村 昇	7
高 知 支 部	横 川 寛 水	8
〃	安 井 護	8
現住所不明者名		9~16
同窓会総会報告		17
事務局だより・校歌		18
昭和55年度決算報告書		19
昭和56年度予算		19
終身会費納入者名		20~25
各種証明書発行について		26
職域幹事さんのご依頼について		26
編 集 後 記		26

表紙 屋上より蛸蛇森を望む(写真クラブ提供)

御挨拶

学校長 西村 博

同窓会の皆様には、国内、国外の各地で益々ご健勝にてご活躍のことと心からお慶び申し上げます。

この度、会報「にしきうら」第六号が発刊されるに当り、ご挨拶の機会を与えられて大変嬉しく思います。今年の8月9日に、清家同窓会長さんや、

役員の皆様の大変なお骨折りて母校で、同窓会本部総会が開催されました。地元、高知市、幡多地区より多くの同窓生が参加し、中国の古い言葉でありますが「友あり、遠方より来たる、また楽しからずや」の通り盛大に会が催されお互に旧交を温めて頂きました。お互に顔を見せ合っただけで、心と心が通じた。会であつたように思いました。昭和16年4月に須崎町に高知県立須崎工業学校創立以来、今年で40年の年月を迎えました。今年の卒業生を加えますと卒業生の数は5598名にもなります。同窓会の皆様のご近況をお伺いする度に、それぞれ自ら選んだ道を、しっかりとした態度で、じっくり歩んでいる様子が想像され、たのもしさを感じさせられます。皆さんが、須崎工業高校を巣立ってから、この学校も年々変わってきているわけです。糺町の旧校舎時代から、多ノ郷和佐田の新校舎に移転と外見も時代の推移と共に変化していくことは避けられませんが、

内面的なものや精神的なものについては、あまり変つてはしくないと、いうのが、同窓生の皆様の偽らざる気持だと思います。いつのまにか形作られた伝統は今後も個人の力ではたやすく変えられるものではありません。現在、須崎工業高校の、教育重点目標は、規律 勤勉 友愛 でありませう。この創立以来の伝統は今も受けついでおります。今後も職員一同力を合せて、皆さんの母校である須崎工業高校の、質、量、両面の発展を続けて行く考えてあります。何卒、母校に対していつも暖かい関心を寄せて頂きたいと思ひます。それでは須工高同窓会の限りない発展と皆様のご健康とご多幸をお祈りしましてご挨拶といたします。



屋上より大阪セメント、高知工場一万屯岸壁を望む
(提供・写真クラブ)

同窓会の末永い発展を求めて

同窓会長 清 家 寛
事務局長 島 崎 良 一

会員の皆さんお褒りありませんか、「にしきうら」も蔭さまで6号を発刊することができました。会報が毎年発行できるのは、会員各位の御協力のもと役員並に幹事の方々、更に母校諸先生方の御理解ある御協力、御指導の賜物でございます。会を代表して心から感謝と御礼を申し上げます。

さて去る八月九日本部総会が母校で開催されました。会員の方々多数ご参加下さり、また校長先生はじめ諸先生方の御臨席を得て盛大に開催することができました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

さて「同窓会の現況は」本会の末永い発展をはかるための基礎づくり時代のように思はれます。

会員の皆さんには、公私ご多忙のことと思いますが、母校の発展と共に同窓会の末永い発展をはかるため次の「二点」について格別の御理解と御協力を願います。

会員の皆さんにお願い

一、同窓の親睦を深めて下さい。

企業内や職域内では、須工会や同窓会が行われているところが各地にあります。今後はより多くの企

業や職域で同窓の親睦会が開かれるよう御努力下さることをお願いいたしますと共に、会が開かれた場合はその様子を会報に載せて、全国にご紹介させてもらいたいと思っておりますので、その記事及び写真を本部署事務局まで送って下さるようお願いいたします。また総会や支部会へは、進んで参加し、より多くの同窓を知ると共に親睦を深めて下さい。

後輩達は年々新しく加入して参ります。先輩の方々には後輩をどうか暖かく迎え、引き立て、やって下さるようお願いいたします。

二、会費未納の方は

「終身会費」を納めて下さい。

年会費を毎年納入しようという方の中にはありますが、現実には殆ど実行されていません。

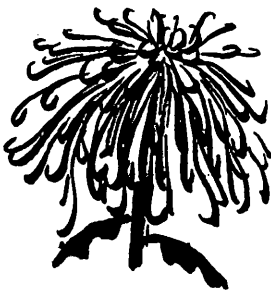
数年前から後輩達は、卒業の時点で殆どの者が、終身会費を納めてくれています。またそれ以前の卒業の方々からも終身会費を納入してもらっています。同窓生の全体から見れば僅少です。同窓会を今後大きく発展させるために、会員の皆さんの御賛同を得て、会費を「終身会費」一本にすることが出来

れば、会は大きく発展できる財源の基盤が確立します。ので、去る八月九日の本部総会にこの件を提案、協議の結果、参加者全員のご賛同を得まして、会費は終身会費（二万円）に統一することに決まりました。

既に実社会にご活躍されている同窓の皆さんには、向かとお費の多いことと思いますが、右事情を御覧察下さいまして、本会発展のため、未納の方はなるべく早い時期に、終身会費を納入下さるようお願いいたします。

尚その納入については、分割払（一ヶ年以内）も結構です。何卒ご協力下さるようお願いいたします。

終りに臨み、会員の皆さんの御健康と、ますますの御活躍を祈念し、合せて母校の末永い御発展を心からお祈りいたします。



学校近況

教頭 久正 一

本校は今年四月で開校四十周年を迎えました。人間の年で云えば不惑の年に当るわけです。そして旧卒業生にとっては多くの思い出を残した札幌の校舎を去り、昭和四十七年四月この新校舎に移転してから十年目を迎えています。この間に施設、設備も次第に充実し、すばらしい環境に恵まれて他の工業高校にも負けない立派な学校となりました。この一年間の近況をお伝えします。昨年は、九月一六日の校内水泳大会では選手全員水しぶきをあげて力泳し、一八日の高吾地区体育大会では柔道部が優勝した外、陸上、サッカー、バドミントン、軟式庭球も健闘し上位入賞を果しました。修学旅行は二年生が十月三日から五泊六日で京都、信州、東京方面を西村校長の引率で旅行し、学生生活の思い出を刻んできました。十月十七日には校内陸上大会が曇天の下で開催されましたが、砲丸投げの部で3MB南部考之君が一二m三三を投げ三十六年度長山泰君の一二m二三を二十年ぶりに破り校内新記録をつくりました。

十一月十六日には第十二回文化祭が教職員、生徒全員の協力により華やかに開催されました。前日午後は好天に恵まれ、宣伝のため各クラス共テーマにふさわしい趣向を凝らして大間と旧市内へ仮装行列に繰り出しました。交通事情のため大間の須崎農協の裏を廻り、市役所より墓地側の道を通り川端通りを下って商店街本通りを練り歩き、旧校舎跡のスーパー「ゆたか」を廻り市役所前を通って帰校しました。沿道では多数の市民の歓迎をうけて好評のうちに宣伝効果を上げました。文化祭当日は午前九時校門において西村校長、矢野昌道生徒会長のテープカットにより開会しました。前二回とも雨に見舞われたので天候を心配していた所、開会式後又雨となり受付にテントを張るやら慌てましたが、一時間後にはすっかり雨も上み天候も回復したので助かりました。お蔭で前回を上回り約千八百名の来客を迎え盛況の裸に終了しました。日頃見かけない多数の女生徒の観客を迎え我が校男生徒も大喜びでした。校内駅伝全校マラソンも恙がなく終了し、本年三月には昭和五十五年度卒業生が一五一名集立っていきましました。機械科六七名、造船科九名、化学工業科一九名、電気科五六名で卒業生総数は五五九八名となりました。産業界の景気回復に伴い求人数も多くなり、全員就職、進学して自己の道に進んでゆきました。先輩のご指導をお願いします。

次に三月末の教職員人事異動で転任、着任された諸先生を紹介いたします。

転任	着任
小笠原幸雄(国)	高知東 村永秀邦(国)
吉良 雅夫(社)	高知小津 山中顕夫(社)
中川 浄(体)	高知園芸 川淵伸之(体)
矢野 昌弘(体)	高知小津 加藤奉良(体)
山脇 義樹(機)	高知工定 滝 直道(機)
多田 修(電)	高知工 吉松儀久(電)
川村文化美(数)	嶺 北 伊藤正孝(数)
	新採

金子 信昭(体) 室 水 野中康成(体) 期 講
谷 富貴(英) 時 講
四月七日の昭和五十六年度入学式では機械科七六名
造船科一六名 化学工業科二八名、電気科七二名
合計一九二名の新入生を迎えましたが、全国的な普通
通科志向の影響をうけ定員に足らないのは残念でした。
新学期も始まり五月三日、二四日の県体では
全般的に各種目とも不振で特筆すべきものもなく申
し訳なく思っています。七月一九日甲子園を賭けた
全国高校選手権高知大会では、部復活後三年目の実
力で一勝を念願に大方商と対戦し、ランニングホー
ムランが出るなど全員健闘し、一時は逆転ムードま
で追い上げながら5-4とサウナラ負けを喫したが
よくやつたと賞めてやりたい一戦でした。兎に角公
式戦一勝を自ざして頑張っています。昨年創部のヨ
ット部はその後須崎湾で練習に励んでいましたが、
六月一六日高松市営ヨット競技場で行なわれたイン
ターハイ四国水域予選大会では、香川に次いで第二
位となり実力をつけてきました。九月に滋賀県大津
市で開かれる第三六回国体夏季大会には、本県代表
として出場することになり入賞をめざし頑張ってい
ます。八月九日には本校の創立四〇周年を記念して、
同窓会総会が視聴覚室にて約六〇名の参加で開催さ
れ、食堂での懇親会では昔を偲ぶ思い出話に花が咲
き盛会でした。一日にはPTAの校内美化協力活
動として、炎天下近辺のご父兄多数のご協力を得て
グラウンド下の斜面の草刈り作業によりすっかり綺麗
になりました。PTA、同窓会のご協力を感謝しつ
つより良い学校にするよう頑張る覚悟です、同窓生
会員の今後のご発展とご健勝をお祈りいたします。

職場訪問記

進路指導部

8月初旬、5泊6日の予定で、昨年度卒業生の職場を訪問するため出て来た大阪の街は、やはり暑かった。

8月4日。H食品工業・奈良工場

大和路の松林の美しい地であり、途中の山野、町並みにも何か心惹かれるものがある。M君は、電気保守の仕事についており、皆から好感を持たれている。この工高卒者は優秀な者が多く、本人も頑張らなくてはと話していた。夏の休みには、寮の先輩とキャンプに行くとのこと。女子従業員も多く、充滿するカレーの香は、古都とは異質のように感じられた。

八月五日 K製作所

生駒山の急な傾斜の腰きるところにある、ポルトの生産工場である。事務所で会社の説明を聞くときも、工場からは、絶えず機械音が響いて来る。I君と共に、油びたしの工場内を、大きな声でどなり合い乍ら案内して貰う。案内、本人達は馳れしまつて気にならないようである。中卒者も多く、黙々として機械の中に埋もれていた。本人は、機械保守をやっており、自転車で20分の所にある、大阪産大・2部に元気で通っている。

8月6日 H造船所・大阪工場

広大な工業団地の一面を占める造船所である。S君は、本所で図面関係の仕事をしているとかで、会えなかった。本校造船科の古い卒業生2人がわざわざ

ざ出向いに来て、懐しく話すうち、今の生徒が県外に出たがらないことにも話しが及ぶ。車で空間の多い構内を案内して貰う。今は、ドックにも大型タンカーは見られず、三本脚の海洋油田掘削装置を建造中で、取り引き先の外人技術者も見かけられた。

8月7日 N金属工業・大阪工場

同じような工場の並ぶ裏通り。大阪工場は手狭になつて、滋賀県に新しい工場ができています。ばね材の切断・圧延の作業をやっている。古くからの年長者が多く、機械の自動化に伴い、工高卒の新人の人社を熱望している。明かるい本人は、皆から好かれ社内にも家族的な雰囲気が見られるが、同じ年頂の話し相手が欲しいと私かに漏らしていた。

(岩瀬記)

クラブ紹介

バレエ部

顧問 岡田 健

今年の部員は、三年生三名、二年生五名、一年生一名、計九名の少数者ですので、部員不足に苦慮しています。

高吾地区には、バレエ部のある中学校が非常に少ないため、経験者がほとんどいません。そのため、バレエの魅力が知らず、敬遠して、入部希望者が少ないのが現状です。また、入部した者も、大半が高校入学後、バレエを始めるため、中学時代の経験者を

集めた高知市内の高校に比べると、レベルが数段階落ちます。そんな理由で、果体等では、自分達の力を充分発揮しないまま、相手にのまれてしまう試合が多くありました。

このような厳しい現実ではありますが、熱心な部員達ばかりで、少しでも練習で経験不足を補おうと、放課後だけでなく休日も欠かさず頑張っています。練習量では高知市内の高校にもひけをとりにません。また、休日には忙しいなかOBも来校し、後輩の指導にあたってくださっています。このような日々の努力が好成績につながると部員全員確信し、練習に励んでいます。

九月十七日には、五十三年度、五十四年度連続優勝した郡体が開かれます。高吾地区で男子バレエ部を持つ高校は、本校並びに須崎高校、園芸高校、伊野商業高校の四校です。昨年はうまくリズムにのれずフルセットの末、残念ながら須崎高校に優勝杯を持って行かれましたが、今年は必ず取り戻そうと意気込んでいます。そのため今年も八月十九日から五泊六日の合宿を持ちました。技術、体力の向上は勿論のこと、精神面、チームワークの強化を目指して行いました。OBも数多く参加、指導してくれ、部員全員この厳しい合宿をのり切ってくれました。苦しい合宿を通して、皆それぞれに自信がついたようです。この成果をもとにして、那の大会で優勝するのは無論のこと、二十数校が参加する十一月の新人戦(中村大全)では、五十四年度に果したベストエイトを目指して頑張ります。

今後とも他のクラブ同様、皆様方のあたたかいご声援をお願ひ致します。

部 ヨット部

びわこ国体に 参加して

三 S 楠瀬 博久

僕達ヨット部は、第三十六回びわこ国体に初出場することになった。競技は九月十三日から四日間、大津市の琵琶湖上で行なわれる。

壮行式も無事終り、いよいよ出発の日が来た。初出場の責任はすつしりと重い。だが団結の力を示すために成功させなければならない。がんばろう。高知の棧橋には、校長先生がわざわざ激励に来て下さった。

目的地までは十二時間ぐらいかかるらしい。こんなに長く船に乗るのは久しぶりであった。船中では色々な事が頭に浮んでくる。県庁での壮行式の事、「国体は勝負である。最善の努力をして最高の力を発揮して、県代表として任務を果たしてほしい」と激励された言葉、又学校での激励、先生、友人、家族の顔、ますます責任は重くなかなか寝つけれなかった。翌朝六時半過ぎ大阪港についた。

十三日、水と縁にあふれる若さをスローガンにいよいよ第一日目が始まった。芝生が一面に敷かれた会場に全国各地から六百人余りの若人が集まった。どちらを向いても強そうで圧倒されそうになった。高知県選手団の入場では、胸を張って行進した。開会式は、重々しく、終始緊張した。大会会長が、「ヨットは孤独との戦い、ひいては自分との戦いである。」と言われたことがなぞか印象に残っている。

その後、最初のレース(成年男子)が始まり、レ

ース場に行く高知県のヨットに、ハーバーから皆さんで声援を送った。その夜、先生や先輩にアドバイスをしてもらい、明日のレース(少年男子)の作戦をねった。

出場してみると、気持ちばかりあせり、思うように船を操作できず、経験の浅さと、技術の未熟さをいよいよ感じた。僕達は、力いっぱい努力したがレベルは高く、先生や皆さんの期待にこたえられず、残念な気持ちでいっぱいである。

後輩にはがんばってもらい、これからもヨット部を育ててもらいたいと思う。僕達は、国体に出場させてもらい、良い体験と勉強をさせてもらった。この体験を、今後役に立てていきたいと思っている。

部 野球部

熱球譜、健闘あと一歩 須崎工ナイン

七月二十日付、高知新聞記載より

チーム再建二年めの夏、須崎工健闘及ばず「サヨナラ」に泣いた。

「やっぱり、また勝ててくれ、食いついても、あれぐらいです。ずっと押されつ放しやうたてすから……」 一人倍の情熱で、一昨年の四月に部を復活させ、実に二十九年ぶりに臨んだ昨年の夏は、二回戦(一回戦不戦)で小津に2-1で敗れている。

二年目の相手は大方商。練習試合では川田、保木の完投で連勝している。初回、二死から川島が快打、四番近藤は右翼越え。そのまま足を生かしてランニング本塁打となり、2点を先制する。その裏、先発川田が打ち込まれ、たちまち逆転されるものの、リーフした保木、よく耐えて追加点を許さない。七

回、さらに1点を奪われるが、練習試合で勝っている自信だろう。須崎工は八回、一死二、三塁のチャンスをつかむ。ここで先制の大会2号本塁打を放っている近藤に打順が回った。2-1と追い込まれたの5球目、左越えに二塁打して同点。「やったア」1塁上で思わずガッツポーズの近藤。逆転ムードだったのだが、昨年の県選抜大会で高知を完封している大方商・金子も気迫のピッチングを見せて後続を断ち、土壇場のサヨナラに結びつけるのだ。

昨年の小津戦も最終回、気力で2点を挙げている須崎工。一冬越して、さらにたくましくなっている。チーム再建から、わずか二年ということを考えれば、あと一歩まで実績のある大方商を追い詰めた戦いぶりにはたえられない。

ゲームが終わって、選手たちをねぎらう植田豊年監督、目がうるんでいる。「ほんと、また体力ないですもん。よく、あそこまで三年生を中心に耐えてくれたと思います。うちの力からすりや、上等です。」

「保木がよく投げしてくれたし、ボクにしたら、いいゲームができて本当によかった。後輩たちにはもつといい試合をして、きつと勝ってもらいたい。」と、近藤キャプテン。どの顔も、懸命にプレーしたためだろう。さわやかな表情で引き揚げていった。

写真——初回、果敢な走塁でランニング本塁打を成立させた須崎工、近藤選手。8回には同点の2点タイムリーと一人でチームの全打点を挙げる。



(岡宗)

支部だより

幡多支部

支部結成経過報告と御挨拶

松沢 真三

(昭21年3月機卒)

同窓会幡多支部は、昭和五十五年十一月二十九日中村市に於て、本部より清家会長、吉岡常任理事、島崎事務局長、それに母校より西村校長の御臨席を頂きまして、会員二十三名の参集を得て盛大に発会の式を行い、こゝに新生「同窓会幡多支部」が誕生致しました。

これより前、我々支部結成発起人は、数回に亘り会合を持ち準備を進めて来ましたが、調査をするに従つて、地区内に以外と多くの卒業生が在住していることに勇気づけられ、はやる気持を抑え乍らの発起人会ではありましたが、

支部のテリトリーを、中村市、宿毛市、土佐清水市、佐賀町、大方町、大月町、三原村、西土佐村の各市町村と定め、八十名を越す区域在住者に対して案内状を発送しましたところ、住所不明で返送されたもの、理由をつけての欠席通知に接したものの、又返信無きもの、とさまざまでしたが、結局前記の出席者により、支部発足の運びとなりました。

しかし地区内在住の卒業生の数のアウトラインを掴むことが出来たことにより、今後の支部の活動如

何によつては会員の増大に大きな期待が持てる訳であり、支部会員相互の協力態勢を保ち乍ら、幡多支部を形造つて行きたいと思つております。

云うまでもなく同窓会の二大目的は、会員相互の親睦を計ると共に、母校の発展に寄与することでありまして、我々幡多支部と致しまして、この同窓会の掲げた目的達成に少しでも近寄るよう、意義ある支部活動を続けて行きたいと思つておりますので本部役員各位始め、先輩支部の会員各位の御支援と御協力を切にお願い致します。

関東支部

関東支部副支部長

松本 四郎

(昭30年T卒)

各地の同窓会の皆様には、益々御発展で御活躍のことと存じます。

さて、関東支部では、一九八一年度の須工支部同窓会総会を去る六月六日(土)に田所支部長の御努力により東京の銀座では一流のクラブで華に開催されました。当日の模様について御報告申し上げます。当日は土曜日でもあり歩行者天国とも重なり大変に賑かな中で午後四時より始まりました。出席者は前回より多く、初代支部長の海地さんを先頭に才二代目支部長の片岡さんを初めとする約五〇名の基で行なわれました。

本会にあたり、支部長の田所さんより挨拶があり、会計報告、一部役員の改選と、形どりのセレモニーが行なわれ、引継ぎ、宴会に移ると同時に皆様の

顔色が「マッチマシタ」と言わんばうかつかりの顔で微笑んだ。会場では初めての参加者もあり、いつもながら母校、郷土の話に花を咲せ、又、参加者の年代のちがひもあり、会場の各所で、郷土の地区出身(葉山地区、高岡地区など)別に話がはずんでおりました。私自身も東又出身で、唯もいらないと思つていましたが、S三八年度卒(T科)の金村さんに会うことが出来てふるさとの(東又)話がはずみ楽しい一日でした。酒も十二分はいり宴会もたけなわのところ、田所支部長の計らいで、芸能歌手一人が出演しいつそう宴会に花をそえてくれました。又、支部長は、ギターを弾くなど歌については芸人である。その後皆様による歌合戦となりました。宴会もたけなわになり最後に全員で須工の校歌を合唱しおひらきとなりました。そして、またあえる日までと言いながら、銀座のネオの中に消えて行きました。最後に全国で御活躍の須工同窓の皆様、母校の諸先生、清家会長、事務局の皆様方の益々の御健勝を心よりお祈り致します。

(追記) 総会の都度案内状を送付していただきましたが毎回一〇〇通以上が住所不明、転居先不明等で返送されて来ます。住所等がおわかりになりましたら左記の所まで御連絡いただければ幸いと存じます。

連絡先 〒一〇五東京都港区虎ノ門一―二七―一

沖電気工業(株)サービス本部

TEL〇三―五〇一―三三三―一

松本四郎

中京支部

昭和23年機械科卒

(不二越工業KK社長)

同窓会中京支部長

岡 林 県 市

毎年八月になると支部がよりに投稿するよう依頼の手紙を受け取り、はて何を書こうかと考へ込んでう始末であります。母校の創立三十周年を記念して、吾々中京に住む須工の卒業生も、活動の一環として、中京にも支部を結成しようではないかとの声が高まり、昭和四十五年の八月に創立総会を開催したものでした。以来、四回程の集りの機会を持って同輩の連帯に努めて来ました。同じ時期に、本部において、同窓会の活動も、一段と活発化して、卒業生の名簿の完備、機関紙「にしきうら」が相次いで発行され、母校の近況、同輩の活動状況が、詳しく知らされて、学校と支部、支部と会員の間を、益々、密接に、結ぶ事が出来た事は誠に大きな成果だったと存じます。此の度、「オ六号」が芽出度く、発刊となり、会員一同、色々と過去の思い出、級友の活動状況等、理想乍ら拝見している事と思えます。継続して発刊するという事は並大低な事ではなく、編集に当られた役員の方々のお骨折りを申訳なく感謝しております。

曲折の道をたどり、名古屋へ来てから、すでに二十余年となりますが、当時は石炭列車に揺られて、うんざりする位、長い旅でしたが、今日では自家用車の普及、空路の度、新幹線等の発達で、昔とは較べものにならない程の、至近距離となって来ました。それだけに、中京への就職者も増加し、本校との交流も益々大切な時代となって来ました。須工が多く、年齢を重ねる毎に、初老の域に深く入ります。才が行けば、口程でもなく、動きがにぶくなり、副会長の春田君とも相談して、中京支部の若返りが、吾々の使命ではなからうかと話し合い、近々のうちにも、第五回の総会を開き、役員の改選、事業の活動も潑刺とした世代に交替すべきであると、感じる昨今です。本稿が発刊される頃には、この期待が実現している事を、念願し、努力して行く所存です。同登御一同の御健康をお祈りしております。

大阪支部

(昭24年機械卒)
(大阪教育大学)

下 村 昇

これまでの近畿支部は七〇名余りの会員を擁する大世帯となり、勤務先や住所が広域にわたるため却って運営が難しくなっていました。そこで、活発で、きめの細かい同窓会活動ができるように、近畿支部を分割する方向で準備を進め、昨年、全会員に文書で趣旨説明をした後、京滋、大阪、奈良、和歌山、兵庫の五支部新設について可否をお尋ねし、賛成を頂いたわけです。その後、大阪支部設立の世話人会は名簿の整理、規約等の検討を終りまして、近日中に支部総会開催の段取りをする予定になつてい

ます。

大阪支部設立の世話人の一人として、今後どんな運営、活動が望ましいものだろうかと模索を続けているとこです。丁度、この八月九日、母校で本部総会が開かれるのを機会に、学校の施設の見学も兼ね、先生方、先輩、後輩、友人に色々御意見を伺ってみよう、この総会に飛び込みで出席させて頂きました。

二階の視聴覚教室が会場に当てられていましたが、学校の創設期に育った私には、恵まれた環境、施設で勉強できる後輩諸君を羨ましく思ったことでした。懇親会に移る前の短い時間を利用して、西村校長先生が我々四、五名を食堂一階に御案内下さったが、そこからの眺めは、さながら城の天守閣からの展望のようでした。近くの工場や生徒の就職状況等についてお話があつて、最後に先生は「あれが太平洋です。」と遙か南の方に光っている海を指差されました。子供の頃から毎日のように眺め、よく知っているはずの海であるのに、先生のこの一言は、今も鮮烈な印象と共に耳の底に残っています。校歌にも詠み込まれた太平洋という言葉の、おおらかで、しかも力強い響きが、先生から我々卒業生への励ましのお言葉と思えてならなかったからです。

当初考えていた支部運営のことなど、ビールの栓が抜かれるボンという音と共にどこかへふっ飛んでいってしまったらしく、二次会は矢野亀雄先輩のお世話になつて、底抜けに楽しい一日でした。同窓会は、出席してよかつたと思ひ、明日への活力が生れるなら、それがかんりの目的を果しているように思うようになりました。今後共、よろしく御願します。

高知支部

同窓会雑感 28年ぶりの登校

機械科28年卒

横川 寛 水

八月九日、同窓会総会で二八年ぶりに母校の土をふんだ。高知支部は大型貨切りバスを仕立てて意気揚々と大間へ着いたのは良いが、国道からの入り口がわからず、住宅街へ乗り込んで自転車遊びの子供にしかられる仕末。「もっと太い道をつけちよかいていくかねや」大型バスが学校へ登ったのは、はじめてらしい。

へオレのような不良生は来ないだろう」とひげ目を感じながら行ったが、けっこう不良も来ていたし杯をかさねるうちに、先輩？と思つた後輩と、後輩？と思つた先輩もだんだんはつきりし、時の制服姿が頭に浮かぶ。若い先生が年上と感じたのは、やっぱり、「コワイ」からだろう。

帰つた晩に夢を見た。「単位」が足りないのて登校しなければならぬ……まだ下宿に本とフトンはあるはずだが、会社はどうしたものか……悩んだあげく目が覚めて、あーよかつた。と思つた。

グラウンドで野球の練習に励んでいる後輩たちを見て、「オーイ、ガンバレヨ」と叫んだが、野球部後援会副会長として、未だ一文の寄付も集めてないことに気づき、こそこそと会場へ……先輩のアドバイスもあり、せめて本日ご参集の皆さんにとカンパを訴えたところ四五二〇〇円が集約され、自己満足し、それから酔がまわりました。

ボクはヘタのヨコずきだったから、みんなに引っぱられ、助けられながら体育活動をしたが、そのこ

とが今でも兄弟のような親しみで残っている。だからスポーツは県外からの優秀選手や、プロをめざす者ぞろいの強豪でなくてよいと思つている、もちろん、技の追求は必要だろうが、仲の良いチームづくりをしてもらいたい。

それにしても須工の野球部は貧乏すぎる。ぜひご理解とご支援をお願い致します。

とにかく二八年ぶりの同窓会は楽しかった。次回もぜひ参加したい。そのかわり、高知のよきこい祭りをさけてもらえば、もっと参加者がふえるのではなからうか。

高知重工「須工OB会」紹介

昭31年3月機卒

安井 護

同窓会の皆さん、益々御健勝にて頑張っておられる事とお喜び申し上げます。

扱て、私達高知重工に勤務している「須工OB」のもので組織している「須工OB会」について紹介させていただきます。

我々は同窓会の高知支部に所属しており、本会報で度々紹介されましたように、高知市の表玄関とも言へべき浦戸湾（高知港）の入口に位置しており、浦戸大橋をくぐりすれば、東側に林立するジブクレーンが私達の造船所の所在地です。近くには桂浜、五台山、種崎海水浴場等があり、大いにはぎわっております。

我々の会社は船舶製造業で、従業員千二百名で、工場も三工場に分散しており、漁船専門工場の「開成造船」、三千五百トン以下の商船の建造を主とす

る「永宝造船」更に、三千五百トン以上の商船を建造する「高知重工」であります。

この三工場を合わせ会員は五十四名をかぞえ、昭和三十一年を筆頭に、今年の卒業生迄ほとんど切れ目なく毎年増員しつつあります。

そして我々会員は、造船所の最も大きな役割りを持つ技術面即ち、設計から始まり、工程管理、品質管理、安全管理等、全てを握っているといつても過言ではないと思つています。又、会社からも大きな期待を掛けられており、各自、日夜頑張っております。

こうした会員の中より、一度全員で親睦会を催し、より以上に会社発展を計り、我々の親睦も深めてはとの話が持ち上り、本年六月十七日総員五十四名中五十名出席のもとに、母校の久教頭、竹内、竹村三名の先生をお迎えして、盛大に親睦会を開催致しました。

その席上で、同窓会費の件も持ち出され、我々会員は全員終身会費を納める事を快諾されました。そして例によつて乾杯のあと宴会に入り、諸先生と昔話に花を咲かせたり、中には先生に説教する者等、又各人自慢のノドをふるい乍ら、楽しい、大変意義のある、一時を過す事が出来ました。万才三唱のあとそれぞれの仲間と、二次会、三次会を求めて闇の中に消えて散り、あくる朝は全員でスガスガしい顔を合わせ「良かったぜよ、又やろうや」と次会を替う言葉で、各人の持ち場に就き、その後毎日多忙な仕事に取り組んでおります。

最後に母校並に同窓会の、益々の発展を念じながら、私達高知重工「須工OB会」の近況をお知らせします。

同窓会総会報告

書記 39 M卒

井上 耿介

二年に、一度の同窓会総会が、会員の方々の希望もあり、懐かしい母校で、八月九日、日曜日の午後二時より五十九名の会員の参加で開かれました。

高知支部からは、後の懇親会に全員参加できるように、マイクロバスをチャーターして来てくれました。昨年、発足したばかりの幡多支部からも、連絡を取り合って来てくれました。

又、遠路わざわざ来てくれました県外会員の方々、本場に御苦労さまでした。

来賓として、村木威元校長、学校側より、西村博校長、久正一教頭、田所靖道化工科長に来ていただきました。

総会は、物故会員の追悼の黙禱から始まり、清家会長、西村校長の挨拶、村木元校長の祝辞の後、次の議事を討議承認しました。

議事

一、昭和五十五年度事業並びに決算報告について
島崎事務局長より報告（別紙参照）があり、質疑では、例年の決算は、五月の理事会で審議してその内容を会報で報告しており又、監査報告書は、次回より必ず付けるよう議長より要望もあって承認する。

二、昭和五十六年度事業計画について、

（別紙参照）

質疑後、承認する。

三、同窓会役員選出について、

現役員、全員留任の方向で理事会で話し合ってもらう、ただし役員欠員については、理事会に一任する。

理事会で役員が決定すれば、次の会報に記載して報告する。

四、会則の一部変更について、

清家会長より、同窓会運営上、会則第二十一条の、正会員は、終身会費又は、年会費を納入しなければならない。

終身会費は、一万円、年会費は五百円とする

以上の会則の内、「又は、年会費」と「年会費は五百円」を削除したいとの提案があり、承認。

会則の文章については、理事会に一任する。

五、その他

昭和五十七年度事業計画は、理事会にて決定することを、確認した。

閉会。

午後四時頃より、母校食堂で、五十五名が残って懇親会を開き、昔の学生時代に戻って親交を深めました。



食堂にて親睦中
立てグラスを持っている方
清家会長です。



視聴覚室にて議題討議中

昭和55年度決算報告書

56. 3. 31

	費 目	金 額(円)	摘 要
収入の部	前年度繰越金	365,377	
	入会金	418,000	
	年会費	29,000	
	協力金	0	
	特別会計利息	282,257	定期預金
	雑収入	20,196	普通預金利息他
	計	1,114,830	
支出の部	会議費	9,360	理事会
	事業費	706,700	開校記念品・その他 143,000 会報発行・その他 548,700 調査費 15,000
	通信交通費	58,275	切手代・旅費・その他
	事務消耗品費	3,672	コピー代
	慶弔費	61,720	卒業証書丸筒・支部總會祝他
	支部配分金	84,400	関東 13,000 中京 8,600 高知 32,600 須崎 30,200
	雑費	4,925	振替払込料他
		計	929,052
収入 支出 残 1,114,830 - 929,052 = 185,778			
< 特別会計 >			
終身会費	費 目	金 額(円)	摘 要
	前年度末積立額	7,130,000	
	本年度納入額	1,750,000	
	計	8,880,000	

昭和55年度会計事務について

諸帳簿及び証書類等により監査の結果金額その他については相違なく、
預金通帳・定期預金証書とも確実に管理適正に執行されている。

昭和56年 6月 2日

監 査 下 元 征 夫
" 武 内 徳 雄

昭和 56 年 度 予 算

	費 目	金 額(円)	摘 要
収入の部	前年度繰越金	185,778	
	入会金	384,000	(56年度)
	年会費	50,000	
	特別会計利息	600,000	定期預金
	雑収入	2,000	
		計	1,221,778
支出の部	会議費	30,000	理事会他
	事業費	866,200	1. 開校記念品他 165,000 2. 会報発行費他 622,000 3. 調査費 19,200 4. 総会費 40,000 5. 子備費 20,000
	通信交通費	50,000	切手代他
	事務消耗品費	30,000	コピー代他
	慶弔費	60,000	卒業証書丸筒代他
	支部配分金	155,400	関東14,600 中京 9,200 近畿45,200 高知38,400 須崎46,600 幡多 1,400
	雑費	10,000	
	子備費	20,178	
	計	1,221,778	
< 特別会計 >			
終身会費	費 目	金 額(円)	摘 要
	前年度末積立額	8,880,000	定期預金
	本年度納入目標	2,000,000	
	計	10,880,000	

終身会費納入者名

昭和五十六年九月三十日現在

昭和十八年

中平 萬年 田博 造 橋本 忠行 矢野 龜雄 西川 嘉明 木下 善二 坂本 忠男 田村 耕吉 竹村 昌幸 高橋 昌幸 中岡 当明 広田 四郎 清家 四郎 長山 象一 山中 幸樹 山田 弘幸 海地 清幸 前田 托造 渡辺 康太郎

昭和二十年

矢野 象一 松本 興雄 竹下 増秀

梅原 健一 広瀬 兼男 横島 元幸 宮本 慶清 国広 慶助 小松 章洋 井口 治郎 梅原 治務 中越 青行 中藤 良徳 清藤 良徳 池上 蔦男 片岡 孝人 浜田 善三 堅田 速雄 片岡 弥太郎 浜口 義夫 甲斐 義茂 張藤 泗夫 近森 和夫 片岡 命長 田所 定夫 吉岡 豊夫 広瀬 孔建 梅原 康一 岩山 安成

昭和二十一年

山崎 義輔 大野 純児 北添 健一 梶原 誠幸 寺田 郁雄 吉村 功雄 松沢 真三 山田 豊三 大川内 巖 柏井 秀有 亀山 和夫 小谷 浩三 渋谷 邦治 渋谷 邦治 笹岡 幸助 刈谷 雅幸 戸根 茂富 森下 桂郎 中平 徳喜 大崎 栄郎 楠本 昭昭 島崎 正馨 山谷 芳樹 山中 正義

昭和二十二年

岡崎 範夫 森下 春茂 大藤 益富 広瀬 理

昭和二十三年

島崎 良一 高橋 繁徳 川村 義隆 古谷 義幸 片田 彰 谷口 和夫

昭和二十四年

武内 徳雄 下村 昇 奥代 重恭 吉本 静夫 野瀬 静一 竹内 正茂 島崎 正茂 岡田 信雄 吉村 春政 吉川 貞造 市川 泰輔 和田 富夫 岡林 縣市

昭和二十五年

鍋島 惟孝 竹村 典和 谷武 雄 上岡 親雄 傍士 忠義 王和 雄 古谷 正一 大崎 哲 川村 実

藤本 幸造 楠瀬 富一 竹内 良一 高岡 正幸 横田 雅範 福永 徳七 西森 徳七 矢野 定志 津野 秀志 米女 秀作 武石 英男 横山 三郎 岡村 充喜 田井 利喜 橋田 正喜 堅田 耕一 横山 豊一

昭和二十六年

西田 浩造 森岡 清 横田 晴光 秋沢 英男 池速 水 北川 万 西内 静 大崎 幸 浜田 惣助 近森 久重 上田 泰生 大野 幹雄 高野 寿恵広 長山 貞雄 武政 良一 汲田 正一 森岡 正一 岡田 一 山崎 一 塚本 拓彦 多田 彦 多田 彦 (高尾) 汲野 信男 中野 義則 竹村 寿範 福岡 昭七 森田 泰男

昭和二十七年

中 中 辻 田 谷 高 笹 桑 小 岡 吉 横 山 宮 松 前 堀 林 浜 中 戸 津 谷 谷 高 高 坂 片 尾 奥
野 岡 本 村 中 橋 岡 瀬 田 本 本 山 岡 地 本 田 川 田 城 梶 野 脇 口 橋 橋 本 岡 崎 崎
孝 朗 真 信 久 利 幹 正 啓 伸 良 秀 立 充 修 美 俊 隆 浩 光 德 久 信 晴 浩 信
雄 德 司 行 良 男 男 通 二 次 浩 仁 晃 憲 勝 由 一 利 彦 男 伸 男 一 則 好 強 博 登 助 夫

堅 岡 石 吉 森 明 松 松 西 長 長 中 田 谷 竹 須 芝 笹 北 堅 小 大 衣 上 山 矢 森 松 西 長
田 本 田 田 神 田 浦 田 山 山 田 部 内 内 崎 岡 村 田 野 野 斐 田 本 野 光 田 地 山
孝 光 典 智 一 孝 俊 定 孝 正 貴 信 智 裕 義 幸 浩 利 一 則 育 義 宝 隆 靖 繁 弘
光 弘 久 欣 彦 郎 市 男 浩 基 文 造 久 弥 昭 貢 二 男 浩 司 耕 宏 彦 生 文 宏 浩 弘 広 行

昭和五十五年

中 辻 近 谷 高 高 柴 三 酒 甲 尾 大 伊 井 麻 背 背 沖 山 柳 西 中 中 田 田 竹 高 佐
山 沢 脇 野 橋 宮 井 藤 崎 崎 藤 関 田 木 木 吉 川 本 元 村 谷 村 中 田 田 竹 高 佐
茂 得 友 仁 夫 夫 倡 隆 彦 人 彦 彦 幸 道 志 雄 二 文 一 広 秀 夫 行 彦 登 夫 優 和 也

中 辻 高 高 高 下 佐 桑 国 刈 片 冲 大 吉 渡 山 山 森 宮 溝 松 松 広 浜 浜 野 能 西 西 長
田 本 野 橋 木 元 木 原 沢 谷 岡 崎 岡 辺 本 崎 田 脇 淵 坂 浦 瀬 田 崎 島 見 森 森 山
勝 隆 浩 秀 正 淳 義 和 博 真 敏 重 一 靖 健 功 伸 幸 幸 敏 榮 清 博 治
利 裕 二 一 充 史 晴 智 悟 彦 祐 守 稔 人 幸 光 保 宏 一郎 夫 二 人 男 一 夫 生 志 章 夫 誠

大 山 山 山 森 溝 弘 西 西 高 下 植 今 石 渡 横 矢 矢 山 山 森 森 松 野 能 西 西 西 梨 長
川 脇 下 岡 瀨 森 村 橋 元 村 橋 田 辺 山 野 野 本 崎 岡 田 島 見 村 森 森 山
忠 真 正 建 富 寿 公 祐 寿 秀 広 道 邦 智 健 隆 光 孝 順 英 慶 圭 佳 正 德 千
豊 司 司 人 裕 志 成 亀 一 司 夫 幸 高 良 博 英 二 明 雄 彦 夫 一 樹 次 至 典 忠 幸 春 勇

浜 浜 橋 中 田 竹 竹 坂 酒 近 楠 木 片 尾 岡 岡 大 大 大 市 八 森 松 松 松 藤 中 黒 織 小
田 田 田 山 村 田 内 本 井 藤 目 下 岡 崎 村 野 崎 崎 川 木 下 本 田 浦 本 内 原 田 田
幸 和 道 浩 明 宗 寿 讓 弘 義 三 弘 幸 和 俊 昭 正 典 貴 正 靖 修 忠
俊 典 明 至 彦 一 信 卓 隆 昭 満 二 幸 喜 男 明 造 始 一 男 介 仁 広 久 彦 修 知 彦 蔵 志

昭和五十六年

高橋隆彦	高橋賢治	笹岡巖	笹岡悟	酒井悟	岡林靖二	大崎正	今城秀二	麻城雄介	青山行	中山村也	広瀬一弘	明神良房	壬生一光	久原三啓	浜田光啓	中脇兄志	中野孝司	津野一昭	門脇辰男	会所真一	大崎真弘	岩佐敏己	山下和久	山崎和久	細川源善	久岡孝善
------	------	-----	-----	-----	------	-----	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

戸田雅彦	田村英之	武市惠介	竹崎義裕	高橋義浩	白木安二	下元久弘	笹岡稔温	片岡宗典	入交昭男	出間文喜	吉門英学	山田和幸	森田広誠	水口誠二	松本靖浩	松尾正隆	堀部孝幸	長谷川孝幸	橋田忠広	西森常洋	仁尾常夫	中村智彦	中村智彦	中村智彦	中村智彦	徳弘和親	道家丈典	谷脇政喜	武吉秀文	竹村勇政
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

市川真貴	山本浩士	味元賢一	政岡幸喜	西川敏久	田中治貞	小田司弘	楠岡弘臣	依光悦	山崎正弘	山崎敏章	川本久幸	森本宗泰	森本宗泰	明神隆志	宮地二男	宮崎信一	松本健三	細木正弘	浜口信一	橋田博文	野本健一	西森太志	西南村孝之	中屋剛隆	中屋剛隆
------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

松田昌士	福本憲之	林田敏春	橋島景介	野村浩彦	西村泰隆	中村隆雄	中村隆雄	寺田栄二	津野圭三	高橋圭三	下元俊二	沢村由紀男	佐々木敬助	笹岡行広	坂元稔明	川上良一	堅田高明	大石孝明	岩崎完司	小西喜富	吉村圭志	毛利和雄	藤原隆憲	田村隆宏	谷内利夫	竹内直文	斉藤達也	尾崎達也
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

森田傑	松田仁	堀本二	広瀬英二	橋本孝	中平見	竹内充	高橋宏	田井秀典	嶋内厚志	坂口孝志	楠瀬幸進	奥田裕二	大西隆	山崎幹夫	山岡久彦	森鍋和彦	真鍋和彦
-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------

各種証明書の発行について

(母校事務室からの伝言)

証明書が必要なときは、法令の定めにより証明書交付申請書別紙(用紙は事務室に備付)を校長宛提出しなければなりません。

申請書には必要事項記入のうえ押印し左記金額に相当する高知県収入証紙を貼付してください。遠隔地からの申込みは事務手続に相当の日数を要しますので早目に申込みをしてください。又県外には高知県収入証紙は販売していないので、現金を同封してください。

なお返信用の封筒には切手の貼付、住所、氏名、郵便番号をお忘れなくご記入下さい。

手数料は次のとおりです

- 卒業証明書 一通につき 二〇〇円
- 成績証明書 一通につき 二〇〇円
- 単位修得証明書 一通につき 二〇〇円

送り先〒785須崎市多の郷和佐田甲四一六七ノ三

高知県立須崎工業高等学校事務室

電話(〇八八九四)②一八六一

②一八六一

証明書の件につき不都合または不明な点等がありましたらいつでも右記電話番号の証明係までお電話ください。

職域幹事さんの

ご依頼について

幹事さんには、ご多忙のところ同窓会発展の為に御尽力をいただき厚くお礼申し上げます。

現在一〇〇名(社)の幹事さんに会報「にしきうら」を送り二二〇〇名の会員の皆様のお手元への配布をさせていただいております。

さらに同窓会の発展や会員の相互の親睦のため、職場や地域の会員の中でお世話して下さいさる「幹事さん」をご依頼しております。各支部及び事務局まで名簿と送り先を御連絡下されば同窓会も一層の発展となります。会員皆様の御理解を賜わり御配慮を下さるようお願いいたします。

会員の皆様の御健勝と御多幸を

お祈り申し上げます。

「事務局 Y.T」

編集後記

会員の皆様、益々御健勝のことと存じます。今回 第六号の会報「にしきうら」を発行することになりました。

ご多忙中にもかかわらずご寄稿いただき厚くお礼申し上げます。

今回は現住所不明者を掲載しました。判明次第ご連絡を下さるようお力添え下されば幸いです。

事務局としましても回を重ねることにより充実した内容をおとどけて下さるよう努力をしたいと考えておりますのでお気付の点をご遠慮なくお知らせ下さい。

印刷にあたり須崎市の笹岡印刷所さんにお世話になりました、心からお礼を申し上げます。

会員の皆様の御多幸をお祈り致しております。

事務局編集委員、Y、T、



昭和五十六年十一月一日発行

発行所 高知県立須崎工業高等学校

同窓会事務局

会長 清家 寛

印刷所

高知県須崎市東古市町一番十六号
有限会社 笹岡印刷所